

この箇所が出来事で、「イスラエルのうちでも、これほどの信仰を見たことがありません」、これこそ本物の信仰だと、イエス様がたいへん感心しておられます。イエス様にほめられるような信仰とはどのようなものでしょうか。

### 1. 神を敬い、人を愛する（：1～5）

カペナウムの町に、ある百人隊長がいました。彼はユダヤ人ではありませんが、ユダヤ人の信仰や生活をよく理解していました。そして、ユダヤ人の神を敬う敬虔さを持っていました。それで彼は、ユダヤ人たちが神様を礼拝する会堂を自ら建ててあげたりもしていたというのです。ですから、この百人隊長は町の人たちと良い関係を保っていました。当時のユダヤ人は選民意識を持っていて、異邦人と付き合いをしなかったのにです。

さて、この百人隊長に重んじられていた一人のしもべが、病気で死にかけていました。そんな時、百人隊長はイエス様がカペナウムに来たことを聞きました。病人を癒し、悪霊を追い出し、人々を助けていたイエス様なら、しもべの病気を癒してくださるのではと期待したのでしょう。それで、彼はユダヤ人の長老たちに頼んで、イエス様に自分のしもべを助けに来てくださるようお願いしました。

4～5節。当時のユダヤ人が異邦人のことをこのように紹介し、その人のために熱心をお願いするということは、異例のことだったでしょう。それほどにこの百人隊長の態度が影響を与えていました。神様を敬う敬虔な態度、人を愛する謙遜な態度であったことが伺えます。そして、百人隊長は、病気を癒し、いのちを助けることができる力と権威は自分にはないが、イエス様にはあると思っていたのでしょう。

### 2. みことばの権威に従う（：6～8）

長老たちから百人隊長の願いを聞いたイエス様は、彼らと一緒に百人隊長の家に向かいました。ところが、その家に近づいたとき、百人隊長の使いの者たちがやって来て、イエス様に彼のことばを伝えました。そのことばに、信仰についての大切なことが見られます。それは、みことばの権威に従うということです。

6節後半～7節前半。長老たちは、彼がイエス様に願う「資格のある人です」と言いましたが、彼自身は「資格はありません」「ふさわしいとは思いません」と言います。でも、願いを聞いていただけるなら、「おことばを下さい。そうして私のしもべを癒してください」と求めます。そのように求める理由を、彼は自分の立場における経験から説明します。8節。

隊長の自分が命令すると、そのことば通りに部下は行動します。自分がその場に行かなくても、自分のことば通りのことが実現するのです。自分のような人間でも、百人隊長という立場とそれに伴う権威が委ねられていて、自分のことば通りのことが実現するのであれば、イエス様のようなお方が語られるおことばはどんなにか力があり、そのことば通りに実現するに違いないと思っているのです。

また、百人隊長は、自分自身も神様の権威のもとにあることを信じていたと思います。彼は「私も権威の下に置かれている者だ」と言っています。この場合の権威とは、領主のことであるかもしれませんが、自分のもっと上の隊長のことであるかもしれません。しかし、それだけではなさそうです。なぜなら、この百人隊長はユダヤ人ではありませんが、ユダヤ人のために会堂を建ててあげています。ユダヤの人々が信じている神様を、彼も敬い、もしかすると一緒に礼拝していたかもしれません。神様のみことばを聞いて、神様に信頼を寄せて、生活していたのではないのでしょうか。ですから、神様の権威のもとに自分も生かされていることを認めていたと思います。

同じようにクリスチャンは、神様の権威のもとにこの世界があり、自分が生かされていることを告白しています。権威ある神様のみことばはその通りに実現することを信じています。自分がイエス・キリストによって救われていることを信じて、神様に感謝しています。その救いの確信はどこから来ているかと言えば、それは聖書のみことばに基づいています。クリスチャンの方々はそれぞれ、自分はこのみことばによって救いを確信しているというみことばが思い出されるはずで、また、みことばによって教えられ、励まされ、

導きを示されて、生活していることでしょう。みことばに約束されていることは、その通りになると信じています。そして、自分自身がみことばに従うことができるようにと神様の助けを祈り求めています。そうして、真に権威のある神様のみことばに従っているのです。

### 3. 主イエスの称賛（：9～10）

イエス様は、この百人隊長のことばを聞いて、驚き、称賛しました。9節。イエス様は驚きと称賛を、ついて来ていた群衆に語ります。イエス様が群衆のほうに「振り向いて」、「あなたがたに言いますが」と前置きしているように、イエス様はこのことを群衆に確かに受け留めて欲しいとお考えだったのでしょう。

興味深いのは、イエス様のことばは「これほどの信仰を見たことがありません」というものだけです。つまり、百人隊長のしもべの病気が癒されるようにというようなことはお語りになっていません。

それでも、使いの者たちが家に戻ると、「そのしもべは良くなっていた」と書かれています。病気で死にかけていた人が良くなっていたのです。神様の奇蹟が行われたことが分かります。確かに神様の御業であることが人々に示され、そして記録されたのです。ここで焦点を当てられているのは信仰と御業です。しかも、それらが一つのこととして語られています。

この「良くなっていた」と訳されていることばを直訳すると「良くなっているのを見た」となります。イエス様が「これほどの信仰を見たことがありません」と言われた「見た」と同じことばです。そして、単純に見るとのことばではなく、「見つける」という意味のことばです。つまり、ここで信仰と御業が一つになっている、あるいは連動していると言えるのではないのでしょうか。

イエス様は、「イスラエルのうちでも、これほどの信仰を見たことがありません」、つまり、百人隊長のうちに素晴らしい信仰を「見た」と言われました。そして、それを聞いて戻って行った人たちは、しもべが良くなっているの「見た」のです。そのようにして、イエス様のおことばがその通りになりました。

イスラエルのうちにも見つからないような信仰を百人隊長のうちに見つけたと主は言われました。そのような信仰を主が与えてくださったのです。そして、そのような信仰が与えられたところに、主の救いの御業が行われ、見つけられたということです。ですから、この箇所では、百人隊長の信仰が称賛されているのですが、実は神様の御業がほめたたえられているのです。

同じように神様は、恵みによって私たちのうちにも信仰を与えてくださり、その信仰を見られるのです。そして、その信仰のあるところに、主の御業が行われ、人々が見るのです。私たち教会のそれぞれは、これまで信仰生活の様々な場面で、みことばに基づく信仰を与えられ、みことば通りの主の御業を経験するということがあったと思います。そのような主の恵みを思い起こしたいと思います。

私たちは神様の権威の下に置かれ、それぞれの立場で何かしらの権威を委ねられています。そのことを覚えて謙遜になることが大事です。家庭においても、職場においても、あるいは自然界に対しても、自分自身に対しても、神様の権威の下にあって、それぞれに権威が委ねられていることを覚えていることが、良い関係を作る助けになることでしょう。神様を敬い、人を愛する生活になることでしょう。

そして、神様の権威に従い、みことばを求めることが大事です。主のみことばはその通りになることを信じましょう。みことばの約束に立ちましょう。みことばの勧めに従いましょう。そのような信仰を主が私たちにも与えてくださいます。そして、信仰を与えてくださると共に、主が御業を行われます。そのような主の恵みによって信仰生活を歩むことができるのです。求道中の方々にも、神様の権威を認め、みことばを求める信仰が与えられますようにお祈りします。